

---

# 晴れのち。

七端けい

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

晴れのち。

### 【Nコード】

N2928G

### 【作者名】

七端けい

### 【あらすじ】

ひと昔前、とある農村の男、そして、子供の狐1匹が出会った。そこから、1人と1匹の短く小さな物語が語られる。

## 序章『この空』（前書き）

えっと、まず文章がヘタクソなのはすいません。先に謝っておきます。人間の会話文は『』で、動物は「」で示します。時折本題外での投稿もあると思いますがよろしくお願いします。では、少しの間、お世話になります^^

## 序章『この空』

濁り無い澄んだ空

果てなく広がる碧あおい天井は

今はまだ碧であり無色

・・・さて、この空は今日、どう染まってゆくのか。

もしかしたら染まらないのかも知れない。

でも、それはまだ誰にもわからない。

この空にどう彩いろどりを加えるのかは、

天の上の神様の、その日その時気分次第。

気分屋の神は、今日を、明日を何色に染めるのか。

楽しみに今日を生きてみることにしようじゃない

いか・・・

ああ、今日は・・・

晴れのち。

・  
・  
・

・  
・

・

## 空：01『僕らの空』（前書き）

\*登場人物紹介\* 『真彦』 本名：小林真彦。小学生。今後の出番は未定。『恵子』 本名：飯島恵子・真彦の担任。石碑について語る。次の出番は未定。

## 空：01『僕空』

2135年 4月23日 とある山の林道

今年で小学校4年生になった小林真彦は、春の遠足に来ていた。

昨日は興奮して眠れなかった、なんてことはなくグッスリ休眠できたので足取りも快調そうだ。さすがに4年生で、寝れなかった、はハズいだろう。しかしさすがに歩き飽きた。風景もつまらない。ずっと前だけ見ているのは、真彦くらいだ。飽き性なのだ。天性の。

30人いないか位のクラスメートの列の中央付近を歩いていた真彦は、暇つぶしに先生に質問を投げかけることにした。

『先生。ケーコせんせえい。』

真彦が先生を呼ぶと、先頭で歩いていた恵子先生は歩きながら、振り返った。

『なあに？小林君。』

『あとどんくらいで山頂に着くんですか？？』

けだるそうに問いかけると先生は地図と腕時計を一瞥しあまり考えず『後3分ね』

と口にした。真彦は、騙された。この後15分歩くとは思っていなかっただろう。もうすぐ到着するという安心感が沸いてくると、ふと回りに目をやる気分も出た。すると、あるものに目が留まった。

『（石・・・？何だろう？動物の石像が、石碑の隣に立ってる。文字読めないな・・・）』

それは、高さ80センチほどの石碑の隣に、さらに小回りな動物の石像が立っている、というものだった。

『（狐かな・・・）』

真彦は石像を見えなくなるまで見続け、軽く頭に焼き付けた。

山頂

絶景の眺め。時刻は昼ごはん。最高の醍醐味の時間だ。恵子先生は真彦ら4人ほどの子供たちの班とビニールシートを広げ、昼食の準備を進めた。真彦の班は、1班5人の編成で、1人足りず、4人になってしまったからだ。青と白のチェックのシートを敷き終わると、全員リュックを下ろし、お弁当にありついた。真彦は、まずひと言。『ケーコせんせー、騙したろー』

真彦が軽くすねて聞くと、先生は、『ごめんね』と笑って、卵焼きをあげた。先生の卵焼きは、砂糖の味付けだった。真彦のうちはいつも塩なので、いように違和感があった。

『篠咲君、小林君、どうだった？何か見つけられたかな？？』

真彦がたこウィンナーをつかんだ瞬間そう質問が飛んできた。チラツと隣の篠咲次郎を見たが、次郎は『何も』と言ってしまったので、先生の視線は真彦とたこさんに向けられた。

『どう？小林君は？？』

ウィンナーに訊いてるようではないので、真彦は、気を利かせて話題を作ることにした。

『んぐつ。・・・つと、何か、狐？の石像を見たよ。あとなんか石碑。あれ、何？』

真彦はウィンナーを消化管の旅に出すと、さっきの石像を訊いてみた。

『あら、見つけちゃったか。実はね、先生、その石像の話を昔ひいおばあちゃんに訊いた事があるのよ。じゃ、少し教えてあげるね。』

先生は目を輝かせて予想外にも食い付いた。真彦は、めんどくさいと思いつつも、少し聞いてみることにした・・・・・・。

『もう、500年ほど前のことよ。』

先生が語り始めると、真彦は澄み切った空から視線を先生に移し、聞き入った。

今日は、

晴れのち

『晴れ』だろう。

空：01『僕の空』（後書き）

誤字脱字ありましたらよろしく願います。

空：02『逢瀬の空』（前書き）

だいぶ間があいてしまいましたが。新年度でいろいろな忙しかったです。では、大変遅れましてすいませんでした。

## 空：02『逢瀬の空』

青い空

白い雲

雲量は1割未満。つまり快晴。

今日も、晴れ間が続きますように。

1600年代 農村

1400年代初期、この周辺の地域は他とは確立した文化を発展させていた。

農耕が盛んなこの地域は、四方を山々に囲まれており、外部からの干渉を受けぬまま200年間、独自に栄えていった。

村を流れる主な川は3本。東のく岩透山いわすかしから2本と、北のく花浸山はなひたじから1本だ。支流はそんなに多くない。

西のく土喰山つちくわせと南のく水起山みなおこしの地方は川が不足しているためか発展も乏しい所がある。

ここは花浸山近くの農村。位置は、＜花浸六番＞と示す。

花浸地方の6番目の農村という意味だ。この農村は山に限りなく近く、

北の大きな川、＜辻漬川＞の流域でもある。

そんな環境なので、別にイノシシや野犬に遭う事も、ましてや＜子ギツネ＞の1匹くらい珍しくもなんと無いのだ。

ある日明け方、花浸六番の副村長である＜平八＞は、いつも通り畑を耕していた。まだ春場の気候だが、今日はそこそこに蒸し暑かった。

そんな日だからだろう。小さな偶然が起きた。

『あ？』

平八が＜それ＞に気づいたのは昼時間近だった。

「クウ・・・」

か細い声で鳴く、1匹の狐が畑の片隅にうずくまっていた。

平八は近寄ると鋤を足元に置いて、狐を抱き上げた。

様子を見て、脱水症状だと判断したが、もうひとつ気がついたことがあった。

『こいつ、後ろ足がやられてるな・・・』

確かめるように小声でつぶやいた平八は、鋤を置きっぱなしにして、畑から徒歩2分程度の距離にある自宅の倉庫に入っていた。

手ぬぐいと薬草、それに途中で水を汲んだのを自宅に置き、再度狐の元へ行き、抱きかかえて自宅へ連れて行った。

平八の家

『ほれ、飲め』

つい今目を覚ました狐に、平八は皿に水を注ぎ飲ませた。

狐は、何にも見向きもせず、飲みほした。

後ろ足には、平八の巻いた応急手当の手ぬぐい。  
少し血がにじんでいるのが痛々しい。

狐が飲み干したのを見計らい、平八は  
『うまかったか』

と聞いてみた。

応えるわけは無い。分かっている。  
だが、さびしかったのだろう。

狐の頭をなでてやり、微笑んだ。

「はい、ありがとうございました」

平八は、手を止めた。顔も、引きつる。

この場にいるのは平八以外には狐1匹。

一瞬の静寂。・・・外ではポツリポツリ、音が聞こえる。

そして目の前の狐はこちらを向いて、再び口を動かす。

平八は、頭が真っ白なまま、じっと狐を見つめていた。

「お初お目にかかります。狐のく太助たすけ>といいます。」

今日は

晴れのち、

『  
小雨  
』  
が  
降  
つ  
た。  
。

空：02『逢瀬の空』（後書き）

次回の投稿は早目にできるように精進します）・・（・ノ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2928g/>

---

晴れのち。

2010年10月28日08時01分発行